

雪まつりの面

折口信夫

青空文庫

一昨々年の初春には、苦しい目を見た。信州下伊那の奥、新野^{ニヒ}の伊豆権現の雪祭りに、早川さんと二人で、採訪旅行をしたことであつた。さうして、一週間といふもの完全に、小忌人^{フミビト}の様な物忌みをして、村の神事役の人と共に一つになつて、祭儀の觀察をさせて貰うてゐた。其揚句が、ちよつとの行き違ひから、村の大勢の人たちに反感を催されて、私の頭に、消防組の鳶口の一撃位は、来さうなけはひを感じた。あんな残念な事はなかつた。けれども、毎年新暦の正月十三日になると、今一度、信遠三の境山に囲まれた、あの山村の祭りに、あひたくてならない気がする。其中でも、殊に印象深く残つてゐるのは、正祭の前日の面しらべの行事であ

つた。大小二十に余るお面を、棚に並べておいて、其を上手ワデと称する当役その他の人々が、てんでに新しく、胡粉や、丹で彩色する事であつた。村の人は、此について、合理的な何の説明もせなかつたけれど、かうする事が、年々新しく、お面を作るのとおなじ効果のあるもの、と言ふ信仰を印象してゐる事が考へられた。だがもつと、古く或は、日本的といふことを超越して思ふと、死者のますくに、毎年新しい生命を与へる為の技術のなごりが、仄かに残つてゐる様な氣がして、蠟燭の瞬きが、何とも言へない古代の古代を、空想させた事であつた。

彩色せぬ面もある。其は三つの鬼の面である。十年ほど前の夏、私が此村を訪うて、種紙屋と間違へられた事があつた。其後、こ

の伊豆権現が焼亡した相である。其頃天井^{アマ}にあげてあつたお面祭器類も、持ち出す事が出来ないで了うた。其後お祭りの為に、お面を神事役の年よりが、皆より集つて彫刻したのである。鬼などは、精巧過ぎる程に出来てゐる。此が素人の手になつたとは思へぬ程である。でも、どの面と、どの面とは、誰の作と言ふ事が訣つてゐる。而も、当事者以外には、わかつても知らぬ顔であるらしく、又そんな事を考へるのはわるいと思ふ為か、大した年月も経ないのに、今では問題にもなつて居ない。さうして、年役の人々は、皆それ／＼のお面の形相を評して、不思議な事には、どれもこれも、皆昔のお面に生きうつしだと言つてゐる。中には、自分自身刻んだお面に対して、さう言ふ風に言つてゐる人もある

のだ。さう考へねばならぬのか、祭りになつて愈、お面がはたらし出すとさう感じるのか、私には判断はつかぬが、ともかくも、氣むづかしさうな、ひそく声で、神秘さうに話して聞かした。私は、村々の古典生活の調査に当つて、過重な感激に囚はれる事を、避けたい態度だと思つてゐる。其私すらも、此時は変な氣がして、早川さんと、顔を見あはせた。其後も度々、二人で此を一つ話にした。

この村などは、明治初年この辺一帯に行はれた、奴隸解放運動に似た、被官廃止の騒動の余波を激しく受けて、旧來の歴史を随分に一蹴した事実もあるのである。伊豆権現を携へて、茲に居を占め創めた、村の古い開発者の後の、伊東家を逐うた記憶を、あれ

は、村の為によい事をした、と感じてゐる人々もある位の処なのであるが、其で居て、かう言ふ気持ちも、失はずに居るのである。此村の春祭りについては、村の有識仲藤さんの記述を得て、読者のお目にかきたいと考へてゐる。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

底本の親本：「『古代研究』第一部 民俗学篇第二」大岡山書店

1930（昭和5）年6月20日

初出：「民俗学 第一巻第四号」

1929（昭和4）年10月

※底本の題名の下に書かれている「昭和四年十月「民俗学」第一巻第四号」はファイル末の「初出」欄に移しました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2007年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪まっりの面

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>